Osaka University Knowledge Archive

Title	行為の記述をめぐるコンフリクトと、二人称性の問題
Author(s)	嘉目, 道人
Citation	メタフュシカ. 2022, 53, p. 13-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90206
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

行為の記述をめぐるコンフリクトと、二人称性の問題

嘉目道人

序

本稿は、コミュニケーションの場における特定の意図的行為がいかなる行為であるかを記述する際に、記述者が身を置くパースペクティヴについて、倫理学的な問題意識から若干の考察を加えるものである[1]。念頭に置かれているのは、次のような問題である。一般に、意図的行為についての行為者自身による記述は、他人による記述よりも妥当であるとみなされる。しかし、当の行為が他人に直接影響を与えるものである場合、影響を被った側からの行為記述というものも存在するだろうし、その記述は行為者本人による記述とは異なることも多いだろう。その場合には、当の行為が他人に直接影響を与えるものでない場合とは異なり、行為者側の記述だけを考慮するのでは不十分なのではないだろうか。

この問題にアプローチするための出発点として、本稿では G. E. M. アンスコムの古典的な行為論を取り上げる。ただし、そこから言語行為にまつわる倫理的な問題へとアプローチしていく上では、主にユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論および討議倫理学を援用する。とりわけ本稿が着目するのは、行為がコミュニケーションの中で記述ないし再記述される際に、当事者たちが身を置くはずの「一人称と二人称の参加者のパースペクティヴ」（Habermas 1983, 146［213］[2]）である。ハーバーマスがこれを「我－汝のパースペクティヴ」（150［219］）と表現していることからも示唆されるように、これはマルティン・ブーバーの言う「我－汝」の態度（vgl. *IuD*, W4, 39［7］）、あるいはスティーヴン・ダーウォルの言う「二人称的な観点」（Darwall［2006］2009, 3［9］）にも通じる「相補的」なパースペクティヴである（vgl. Habermas 1984, 56［74］）。アンスコムによる意図的行為の分析においては、こうしたパースペクティヴが考慮されていない。それゆえ、ここに列挙した観点を踏まえて再検討することには、一定の意義が認められるであろう。

1　嘉目（2020）において筆者は、言語行為によって引き起こされる発語媒介効果は発語内行為の拘束力とは違って不可逆的なものであり、そこには固有の倫理的な問題が生じうると指摘した。本稿は、この議論と軌を一にしている。

2　以下、引用に際して既存の邦訳を参照した場合は、そのページ数を併記する。訳文については、引用者の判断で適宜変更している。また、同一の文献からの引用が連続する場合、二か所目以降はページ数のみを記す。

本稿の議論は以下のように進行する。まず、アンスコムの行為論において、行為者自身による行為の記述がどのように位置づけられているかを確認する（1）。次に、この理論に従えば、他人による記述との間に齟齬が生じる場合はどのように考えられることになるのかを明らかにする（2）。その上で、他人による記述には二人称的／三人称的という区別を設けることが妥当であること、また、記述の齟齬はハーバーマスの言う了解志向のコミュニケーションにおいて解決が図られるべきであることを論じる（3）。

1．意図的行為とその記述

アンスコムの著作『インテンション』（Anscombe［1957］2000）は、現代における哲学的行為論の嚆矢とされる古典である。同書では、意図的な行為とはどのような行為か、が問題となっている。「なぜそれをしたのか」と問われて「私は自分がそれをしていることに気づいていなかった」といった答えが返ってくる場合、それは意図的な行為ではないと考えられる。たとえば、自分が窓を開けているということを、（奇妙ではあるが）自分の腕の動きを観察して初めて知ったのだとすると、それは意図的な行為とは言えないだろう。それゆえ、意図的な行為とは、行為者がその理由を「観察によらずに知っている」（13［44］）ような行為である、と結論付けられる。自らの意図的行為についてのこうした観察によらない知識を、アンスコムは「実践的知識」（57［124］）と呼ぶ。

アンスコムの考えでは、意図的行為を考察する上で問題にすべきは、どのような出来事が「意図的」なのか、そして「意図的」とはどのような性質であるか、ということではない。

> 実際には、「意図的」という語は出来事の記述の形式に関わる語である。そのような形式にとって何が本質的であるかは、「なぜ」の問いに対するわれわれの探究の結果が示してくれる。出来事がこの形式で記述されるのは、典型的には「～するために」や（ある意味における）「～だから」といった言葉が記述に添えられている場合である。（84-85［175］，傍点は引用者）。

誰かの行為だとみなされる出来事に対しては、それがどのような行為であるのかを複数の仕方で記述することができるのだが、「意図的」という語は、出来事そのものというよりも、むしろその記述の形式、いわば記述のされ方に関わっている。そして、どの記述が意図されていたものであるのかは、「なぜ」という問いへの答えによって示されるというのである。

アンスコム自身が提示している例で説明しよう。一人の男が、ポンプを操作してある家の貯水槽に飲み水を供給している。しかし実は、その水には毒が入っており、この男は、その家に住む反ユダヤ主義の独裁者を暗殺して政権交代を実現する計画の一端を担っているのだ（cf. 37-41［88-95］）。このとき、この男の行為には以下の 4 つの記述が与えられうる。

（A）彼は、腕を上下に動かしている。
（B）彼は、ポンプを操作している。

（C）彼は、この家の貯水槽に給水している。

（D）彼は、住人に毒を盛っている。

これらは四つの行為ではなく、四つの記述を持つ一つの行為である。A, B, C, D はこの順に手段－目的の系列をなしており、A について「なぜ?」と問われた場合には、B 以下のいずれかが、観察を経ることなく理由として与えられうる。同様に、B について問われた場合は C か D、C について問われた場合は D が理由として与えられうる。これは一つの意図的行為である。しかし本人がそれをどのように記述するかは、「なぜ?」と問う側が A, B, C の何れについてそれを問うかにも依存するのであり、質問者がそれらのいずれを問うかは、その人が A, B, C がそれぞれ属している文脈のいずれに関心を寄せているかに依存する、ということになるだろう。

また、上で述べた反ユダヤ主義の独裁者の暗殺という動機ないし目的は、（A）から（D）までの記述の系列には含まれていないが、これは問題にはならない。もちろん、（D）の後にさらに（E）を追加して、ある程度事情に通じた者から（D）について「なぜ?」と問われた場合に、その目的を答えてもよい。だがいずれにせよ、「なぜ?」という問いの可能性にも、それへの答えの可能性にも限界はあるし、行為者が意図的行為を行うとき、終端の（おそらくは非常に大局的で抽象的な）目的を意図していることはまずないだろう。そうした遠い目的は、「なぜ?」という問いへの答えに対してさらに「なぜ?」と問われ、事後的な反省を経て「たぶん～だからだと思う」などと答える場合にしか登場しないだろう。

以上のように、アンスコムの考える意図的な行為とは、行為者本人が「なぜ?」という問いに対して理由として提示する記述によって表現されるような行為である。これは、次のような考え方を支持する議論であるように思われる。すなわち、誰かの意図的行為がいかなる行為なのかについて、その行為者本人だけは特権的に知っている、という考え方である（cf. 鴻 2017, 169）[3]。実践的知識がある種の自己知である限り、こうした考え方は自然なものだと言えそうだし、実際に、われわれの日常的な行為連関とそれをめぐる言説においては、しばしば目にするものでもある。

しかしながら、行為者自身にのみ特権を認めるこうした考え方がそぐわない場面もまた、ごくありふれたものとして現実に存在しているのではないだろうか。たとえば、私は自動車をただ安全に走らせていたのだが、周囲の人からはスピードの落としすぎで危険運転だったと言われるかもしれない。あるいは、私は満員電車の中でただ立っていただけなのだが、実際には誰かの足を踏んでいた、といった場合もあるだろう。このように、行為者本人とその周囲の人々との間で、行為の記述について見解の不一致が生じる場合は、決して珍しくない。この点についてアンスコム自身がどのように考えているのか、節を改めて論じよう。

２．記述のバッティングをどう考えるか

アンスコムは、「なぜ」の問いが適用できないと考えられるケース、つまり意図的でない行為

[3] ただし、日本語新訳の訳者である柏端達也は、こうした理解に対して否定的である（cf. 柏端 2022, 269-270）。

のケースについても論じている。「なぜ」という問いに対しては、次のような形で回答が与えられることもありうる。

（1）「私はそれをしていることに気づいていなかった。」

たとえば、庭に水を撒こうとしている人がいて、別の誰かがホースを踏んでしまっているときなどがこれに当たる。「なぜ?」という問いに対して（1）のように答えることは、意図を述べているのではなく、むしろその行為の記述について、意図が表現される記述形式の適用を拒絶しているのである（cf. 11-12［40-42］）。

（2）「それは私の意のままにならない動作なのだ。」

たとえば、睡眠中に全身がびくっと動いた場合などがこれに該当する。これは、不随意な行動であり、観察によることなく知られる原因をもたない。医学的ないし生理学的な診断の結果、「なぜ?」という問いに対する答えを与えることもできるだろうが、しかしそれは行為の意図への問いとしての「なぜ?」に対する答えにはなっていない（cf. 12-15［42-48］）。

以上の 2 つとは別に、次のような回答も考えられる。

（3）「とくに理由はない。」

あるいは、「単にそうしたいと思ったからだ」「つい衝動的にやってしまった」「やることがなくて……意味のない落書きをしていただけだよ」（25［67］）等も、同じカテゴリーに属す回答である。アンスコムによれば、これらは「なぜ?」という問いに対する拒絶ではない。ポケットにいくらお金が入っているかを問われて、「まったくない」と答えるようなものだという（これは数字を答えてはいないにもかかわらず、有効な回答とみなされる）。しかし、意図的な行為の記述というわけでもない。それは、「随意的であるが意図的ではない」（26［69］）行為に属する、というのが彼女の見解である（cf. 25-26［67-69］）。

ただし、これは行為者が誠実に答えている場合の話であって、実際に上のような回答がなされるときには、単に意図をごまかそうとしている可能性の方が高いだろう。これについては後述する。

以上のようなアンスコムの説明のうち、行為者本人と他人による行為記述の食い違いが重要なテーマとなりうるのは、（1）である。なぜなら、（1）においては、行為者本人による記述よりも、他人による記述の方が、その行為の記述として妥当である場合がありそうだからだ。水撒きのホースの例を考えてみれば、ホースの上に立っていた人の行為の記述としては、単に「そこに立っていた」よりも、むしろ「ホースを踏んでいた」の方が妥当である、という判断は自然なものであるように思われる。

アンスコムがここで取り組んでいるのは、「意図的行為とは何か」という問題である、ということには注意しなくてはならない。本稿がここで提起しようとしている問題は、アンスコムの用語を用いて表現するなら「行為の妥当な記述とは何か」というものになるだろう。これは、アンスコムが取り組んでいたものとは異なる問題であり、それゆえアンスコムが（1）を重要視していなかったこと自体に不思議はない。

けれどもその一方で、アンスコムが前節の（A）−（D）の行為を記述する上で、行為者の実践的知識を記述の妥当性の決め手としており、それゆえ行為者が証言する記述こそが意図的行為の妥当な記述である、と考えていることも間違いのないところである。

だが、一般に行為は（かりに物理的な運動の割合が小さい場合であっても）この世界で起こる出来事である。そして出来事自体は観察によって知られうるものである。周囲の人々は観察によって私の行為についての知識を獲得することができるし、それは私自身にも言える（うっかりホースを踏んでしまっていたことに気付くかも知れない）。それゆえ、「観察によらない知識」という説明装置の導入によって、一つの事柄をめぐって二種類の知識が並走することになり、それら相互の関係が新たに難問となるのである（cf. 柏端 2022, 270）。われわれが営む現実の社会生活においては、他人の観察による記述にもとづいて行為者の過失が責められることもありうる。そして、それが不当な扱いであるとは限らない。そうでなければ、差別やバイアスにかかわる多くの社会問題の解決は困難になるだろう。また、行為者が常に誠実に自らの実践知にもとづいた記述を証言するとは限らない。むしろ、われわれは、全くの虚偽であれ、ちょっとした印象操作であれ、自分に都合の良い記述を行いがちである。

それゆえ、提示された複数の行為の記述にバッティングが生じる場合には、たんに行為者の実践的知識に照らしてその妥当性が判断されればよいわけではない。むしろ行為者自身による記述についてもその妥当性が吟味される必要があるし、それを可能にするような哲学的・倫理学的な議論の枠組を、われわれは必要としている。これは、アンスコムの行為論の射程を超えた問題設定である。したがって、以下ではアンスコムを離れ、別の参照軸を設定して考察を続けることにする。

３．行為の二人称的記述と、討議的認証手続き

前節では、行為の記述に用いられる知識として二種類のものが考えられることを述べた。すなわち、（a）行為の意図について行為者本人がもつ実践的知識と、（b）本人以外ももちうる、出来事についての知識である。しかし、この区分は拡張することが可能であるように思われる。それは、言わば行為の受け手となる他者が存在するか否かに応じた区分である。

行為者の意図にかかわらず、その行為が他者に対して影響を及ぼすものである場合は、倫理的な問題が生じうる。たとえば、自覚がないままなされた差別的言動などはそうである。こうしたケースにおいては、行為者自身のパースペクティヴからなされる行為の記述だけでなく、その影響を被る者のパースペクティヴからなされる記述ないし再記述も、尊重されてしかるべきだろう。そして、これは単なる出来事の記述とは区別されるべきである。たとえば、私が棒で地面を叩く

のと、人を叩くのでは、動作が似通っていても行為としては大きな違いがある。この違いについて、もう少し掘り下げてみよう。

スティーヴン・ダーウォルは、著書『二人称的観点の倫理学』において、「道徳的義務や道徳的責任、人への尊敬や人の尊厳、道徳的行為主体に特有の自由は、すべて二人称的であり、他のものに還元することができない」(Darwall [2006] 2009, x [2]) と主張している。ダーウォルは、「あなたと私が、互いの行動や意志に対する要求を行ったり承認したりする際に取るパースペクティヴ」(Ibid. 3 [9]) を二人称的観点と呼ぶ。ダーウォルの基本的立場は「道徳的な規範性の源泉は二人称的である」というテーゼに集約されうると言える。また、この立場から、ダーウォルは二人称的な道徳的権威についても語っている[4]。

典型的な例としてダーウォルが提示している状況は、誰かがあなたの足を踏んでいる、というものである。あなたはその人に対して、足をどけるよう求めることになるが、このとき相手が足を退ける理由となるものには二種類あるという。すなわち、「行為者中立的 (agent-neutral)」(6 [12]) な理由と、「行為者相関的 (agent-relative)」(7 [14]) な理由である。

「行為者中立的」は「客観的」(9 [16]) とも言い換えられる、三人称的な理由である。この場合、私が足をどける理由は以下のようなものになる。一般論として誰かが痛みを感じている状況は残念な状況であり、そして今、ここに足の痛みを感じている人がおり、さらに偶然にも、自分はその人の足の痛みを取り除くことができる立場にある。以上の理由から、私は足を退ける。もちろん、これは道徳的とは呼べない、むしろ私が出来事をどのように認識するかに依存する、認識的な理由である (cf. 6 [12])。

これに対して、「行為者相関的」な理由とは、二人称的な理由である。「二人称的理由の妥当性は、人と人との間に前提される権威関係および責任関係に基づいているのであり、それゆえ、理由が人から人に宛てられる可能性に基づいているのである」(8 [15])。行為に権威や責任が伴う場合とは、その行為が対人行為の場合である、と言える。たとえば軍隊において上官が部下に命令する場合には、階級にもとづく権威が伴っており、命令の効力はその権威に依存する。上官である行為者が、部下に宛てて行為するから命令が効力を持つのである。また、幼児に対する保護者の育児行為に責任が伴うのは、行為者が保護者であり、かつその行為の宛先が保護の対象である幼児だからである。他人が保護している幼児に対して、私は大人としての一般的な保護責任を有するかもしれないが、しかしその保護者と全く同じ保護責任はもたない。私が保護者であり、かつ幼児に対して責任をもつとすれば、それはその幼児が私の保護している幼児だからである。

この区別を念頭に置くと、「なぜ横断歩道の白い箇所ばかり踏んで歩くのか」と問われて「私はそれをしていることに気づいていなかった」と答えることと、「なぜ私の足を踏んで私を痛め

---

[4] 実際には、ダーウォルは一つ目の引用箇所で列挙されている項目に加えて、二人称的権威や二人称的に宛てられた行為への理由などについても、安易に文脈を混同することなく別個に語ろうとしているように見える。それはおそらく、二人称的観点の正当化にまつわる問題を考慮してのことであろう。ダーウォルは、道徳に関する二人称的な諸概念は「相互に規定し合う円環構造を成す」(12 [19]) のであり、外部からではなく「最終的には、二人称的観点の内で正当化可能でなければならない」(13 [21]) と考えている。それゆえ、単純な同語反復に帰着させないためにも、個々の二人称的道徳概念をそれぞれ別個のものとして扱う必要があるのであろう。

つけるのか」と問われて「私はそれをしていることに気づいていなかった」と答えることの間には、大きな違いがあるように思われる。前者は行為者中立的な、三人称的な問いであるのに対し、後者は行為者相関的な、つまり二人称的に宛てられた問いである。そしてこの場合、結果的に行為の宛先になっていた相手は、その行為の記述にかんして、ある二人称的な権威を有しているように思われる。それは、行為者自身の実践的知識に（あるいは、実践的知識を欠いており、意図的ではないという自己理解に）もとづいた記述に対して、妥当性の面で優先権をもつ権威であるように思われる。

だが、ダーウォルも認めているように、私の足を踏んでいる相手が「自分の足を退ける二人称的な理由を、分別をもって受け入れることができるとすれば、それは、足をどけることを要求するあなたの権威を、その人が（二人称的に）受け入れる場合に限る」（8［14］）だろう。つまり、相手が二人称的な権威にもとづく記述を受け入れず、自らの記述に固執する主張を繰り返す、という場合も想定可能である。こうしたコンフリクトの可能性を、どのように考えたらよいのだろうか。

こうした問題に有益な示唆を与えてくれるのは、ハーバーマスの「コミュニケーション的行為」の理論、ないし討議倫理学であろう。ハーバーマスによれば、われわれは社会性を獲得してゆくに伴い、「脱中心化された世界理解」（Habermas 1983, 148［217］）を身に付ける。

> 脱中心化された世界理解は、次の二者を統合する複合的なパースペクティヴ構造によって特徴づけられる。一つは、三世界の形式的準拠体系に根拠づけられて世界に対する態度と結びついたパースペクティヴであり、もう一つは、発話状況自身に設定されて世界に対する態度と結びついたパースペクティヴである。（149［218］）

これにより、出来事としての行為の記述は命題的真理性の領域で、二人称的な行為記述は規範的正当性の領域で、そして行為者が意図を誠実に記述しているか否かは、主観的誠実性の領域において、討議の議題とされるということになるだろう。今回は見通しを述べるだけに留めざるを得ないが、その詳細については今後の検討課題としたい。

本研究は、JSPS 科研費 JP19K12923 および JP22K12961 の助成によるものである。

（よしめみちひと　哲学哲学史・准教授）

文献一覧

Anscombe, G. E. M. ([1957] 2000), *Intention*, 2. ed., Cambridge, Massachusetts/London, England: Harvard University Press.（G・E・M・アンスコム 著、柏端達也 訳、『インテンション　行為と実践知の哲学』、岩波書店、2022 年。）

Buber, Martin ([1923] 2019), „Ich und Du“ [IuD], in: *Martin Buber Werkausgabe. Im Auftrag der Philosophischen Fakultät der Heinrich Heine Universität Düsseldorf und der Israel Academy of Sciences and Humanities* [W], herausgegeben und eingeleitet von Paul Mendes-Flohr, Kommentiert von Andreas Losch unter Mitarbeit von Bernd Witte, Bd. 4, München: Gütersloher, S. 37-109.（マルティン・ブーバー 著、植田重雄 訳、『我と汝』、第 48 刷、岩波書店（岩波文庫）、2017 年。）

Darwall, Stephen ([2006] 2009), *The Second-Person Standpoint*, 1. paperback ed., Cambridge, Massachusetts/London, England: Harvard University Press.（スティーヴン・ダーウォル 著、寺田俊郎 監訳、会澤久仁子 訳、『二人称的観点の倫理学』、法政大学出版局、2017 年。）

Habermas, Jürgen (1983), *Moralbewußtsein und kommunikatives Handeln*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（ユルゲン・ハーバマス 著、三島憲一／中野敏男／木前利秋 訳、『道徳意識とコミュニケーション行為』、岩波書店、1991 年。）

—— (1984), “Vorstudien zu einer sprachtheoretischen Grundlegung der Soziologie (1970/71)”, in his: *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, pp. 11-126.（ユルゲン・ハーバーマス 著、森元孝／千川剛史 訳、『意識論から言語論へ　社会学の言語論的基礎に関する講義（1970/1971）』、第 2 刷、マルジュ社、1994 年。）

柏端達也（2022）,「訳者解説・あとがき」、G・E・M・アンスコム 著、柏端達也 訳、『インテンション　行為と実践知の哲学』、岩波書店、2000 年、所収、pp. 261-276.

鴻浩介（2017）,「アンスコムの実践的知識論——「それが理解するものの原因となるもの」」、『哲学』、第 68 号、所収、pp. 169-184.

嘉目道人（2020）,「発語媒介効果の不可逆性とフィクションの倫理的責任」、『待兼山論叢』、第 54 号、哲学篇、所収、pp. 1-18.

Conflicts over the Description of Actions and the Problem of Second-personality

Michihito Yoshime

This paper offers some reflections from an ethics perspective on the perspectives in which the describer places himself/herself when describing what an intentional acts are in communication. The issues that are kept in mind are the following. Generally, a description of an intentional act by the actor himself is considered more valid than a description by others. However, if the act directly affects others, there may be a description of the act from the affected party, and that description will often be different from the description by the actor himself/herself. In such cases, it may not be sufficient to consider only the description from the actor's side, unlike the case where the act does not directly affect others.

As a starting point for approaching this issue, this paper takes G. E. M. Anscombe's classical theory of acts. However, in approaching the ethical issues related to linguistic acts from there, we will mainly draw on Jürgen Habermas' theory of communicative acts and the ethics of debate. In particular, this paper focuses on the second-person perspective in which parties must place themselves when acts are described or redescribed in communication. This is the analogous to "I-thou" attitude of Martin Buber or the perspective that is in line with what Stephen Darwall calls the "second-person perspective". In Anscombe's analysis of intentional acts, this perspective is not taken into account. Therefore, it would be of some significance to revisit this issue in light of the perspectives enumerated here.

「キーワード」
意図的行為、実践的知識、行為の記述、二人称性、コミュニケーション的行為